



# 1 月 園 だ よ り

名島保育園 園長 林田 睦子

2021.1.4

謹んで新春のお慶びを申し上げます  
今年もよろしくお願い致します

## 1 月の行事

1 日[金] 元日

6 日[水] もちつき

9 日[土] 子育て支援  
クッキング

11 日[月] 成人の日

23 日[土]

岡部賢二先生 講演会

「感染症について」

場所 名島保育園ホール

時間 10:00～

12:00

## 3 月講演会予定

3 月 13 日 (土)

吉村春生先生 講演会

「心がかぜをひく時」

場所 名島保育園ホール

時間 10:00～12:00

## 1 月の一口メモ

### 【元日】

1 月 1 日。太陽暦が施行されたこの日、  
旧暦の明治 5 年 1 2 月 3 日が明治 6 年元日となった。

### 【初夢】

元日の夜あるいは新しい年の一番始めに見る夢を  
初夢とし、一年の吉凶を占う。昔は「一富士、二鷹、  
三なすび」の順に縁起のよい夢といわれた。  
江戸時代には、よい夢を見るため宝船の絵を枕の下に  
入れて寝る風習があった。

### 【七草】

1 月 7 日。この日、七草粥を食べると 1 年の健康を  
保てるといわれる。七草の種類は地方によって異なるが、  
一般的にはセリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホト  
ケノザ、スズナ、スズシロの 7 種類。

### 【どんど焼き】

1 月 8 日。正月のしめ飾りやお札を焼く行事。  
書き初めをして焼くと、字が上手になるといわれる。

### 【鏡開き】

1 月 11 日。お供えの鏡餅をたたいて割り、お汁粉に  
入れる。  
鏡餅の由来は、古代から神器とされた鏡の丸い形を  
模して神様にお供えしたことによる。

### 【成人の日】

昭和 23 年に制定された国民の祝日。  
20 歳の人を対象に、「大人になったことを自覚し、  
みずから生きぬこうとする青年」を祝い、励ます日。

# <お知らせ・お願い>

※ 『もちつき』について 1月6日(水)

2階クラスの子どもさんは空のお弁当箱を持って来て下さい。

(献立はカレーの予定です。) 玄米ごはんは、園で用意します。

今年はコロナウィルス感染拡大防止の為、職員と園児のみで行います。

お手伝いのお声掛けを頂きました保護者の皆様、ありがとうございました。

※ 連絡先・予防接種や定期健診について

予防接種や定期健診を受けられた方、また、住所・電話番号が変更になった場合は児童表に書き込みますので、担任にお知らせ下さい。

※ 欠席・遅れ等の連絡について

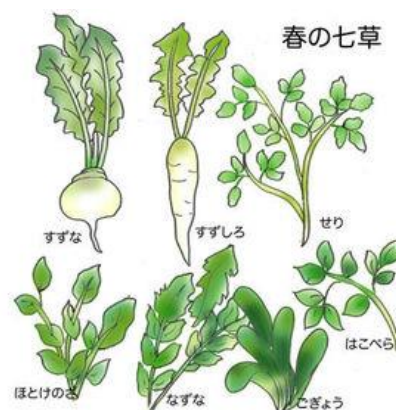
欠席される場合、又遅れる場合（9時以降登園）は、9時までに理由を添えて（家庭保育か病気名等、）保育園の方に連絡を入れて下さい。

固定電話① 092-682-2720

固定電話② 092-662-7807

携帯電話 080-3485-1809

平日19時以降または、祝日に緊急の連絡がある場合はクラス担任の携帯へ連絡をお願いします。クラス担任の携帯番号登録がお済みでない方は担任までお知らせください。





## 祈りとは生活そのもの

私がよくお話しすることに「祈りとは生活そのもの」という言葉があります。毎日の生活をどう受けとめ、どう生きるのか。その心なくして祈りは分かりません。気分に合わせて、神様に願いごとを訴えるのが祈りと思っている人も多いでしょう。自分では行動もせず、何もしないでたくさんのお願いをします。

しかし、生活とは、字のごとく活気のある生き方、足元の「衣・食・住」を日々のなかでどういただくのかということです。自分の都合、わがママが主体では祈りとはいいません。人との縁があって、それに助けられながら、生かされている自分がある。今日がある。その大切さに気づけば、日々の生活によって養われた心がお天道さまとつながり、心の目が開きます。目には見えない自然の力、いのちの力にふれることで根は育ちはじめます。もし母親なら、その根は夫婦へ、子どもたちへと広がっていくでしょう。生活そのものが変わっていくはずです。

この精神には「食べ物を捨てたらお天道さまに申しわけない」と叱った母の心があります。その心を引き継いでいる私の料理教室は、くずを出さないというのが基本です。根っこも葉っぱも何でも全部使います。くずでも全部みじん切りにして炒め、だんごにして葛とじ、フリッター、かき揚げ、コロッケ、お好み焼きと食卓をにぎわします。ときには、創作料理よりもこのほうが主力に居座ったりして、智恵や楽しみが増えるのです。

たとえば、玉ねぎの実<sup>実</sup>は根<sup>根</sup>の力<sup>力</sup>で育つ。その力<sup>力</sup>はいのち<sup>いのち</sup>です。

栄養分析には出てこない、自然の力<sup>自然の力</sup>そのもの<sup>そのもの</sup>なのです。そのことを頭<sup>頭</sup>ではなく心<sup>心</sup>で知<sup>知</sup>っていれば、玉ねぎの根<sup>根</sup>も捨<sup>捨</sup>てられない。

このいのち<sup>いのち</sup>の力<sup>力</sup>をい<sup>い</sup>た<sup>た</sup>だ<sup>だ</sup>いた<sup>いた</sup>とき<sup>とき</sup>に心<sup>心</sup>も体<sup>体</sup>も健康<sup>健康</sup>に導<sup>導</sup>かれる<sup>れる</sup>のです。

くず<sup>くず</sup>を捨<sup>捨</sup>てない<sup>ない</sup>のはケチ根性<sup>ケチ根性</sup>からではありませ<sup>せ</sup>ん。

それは見<sup>見</sup>え<sup>え</sup>ない自然<sup>自然</sup>の力<sup>力</sup>、いのち<sup>いのち</sup>にあり<sup>あり</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>う<sup>う</sup>の心<sup>心</sup>があ<sup>あ</sup>っ<sup>っ</sup>て<sup>て</sup>で<sup>で</sup>き<sup>き</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>と。

料理<sup>料理</sup>を通<sup>通</sup>して学<sup>学</sup>んでい<sup>い</sup>こ<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>とい<sup>い</sup>う姿<sup>姿</sup>勢<sup>勢</sup>のあ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>です。

見<sup>見</sup>え<sup>え</sup>ない自然<sup>自然</sup>の力<sup>力</sup>、いのち<sup>いのち</sup>の力<sup>力</sup>をどう<sup>どう</sup>見<sup>見</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>か。それは、お天道<sup>お天道</sup>さま<sup>さま</sup>をどう<sup>どう</sup>み<sup>み</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>かとい<sup>い</sup>うこ<sup>こ</sup>とにもつ<sup>つ</sup>な<sup>な</sup>が<sup>が</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>す。お天道<sup>お天道</sup>さま<sup>さま</sup>の見<sup>見</sup>方<sup>方</sup>を人<sup>人</sup>に聞<sup>聞</sup>いて<sup>て</sup>もわ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>んし、教科書<sup>教科書</sup>を読<sup>読</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>て</sup>もわ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>ん。自分<sup>自分</sup>で体<sup>体</sup>験<sup>験</sup>する<sup>る</sup>しか<sup>か</sup>ない<sup>い</sup>の<sup>の</sup>です。

心<sup>心</sup>の目<sup>目</sup>でしか見<sup>見</sup>え<sup>え</sup>ないお天道<sup>お天道</sup>さま<sup>さま</sup>は、自分<sup>自分</sup>で動<sup>動</sup>いて体<sup>体</sup>験<sup>験</sup>した分<sup>分</sup>だけわ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup>とい<sup>い</sup>う世界<sup>世界</sup>です。や<sup>や</sup>っ<sup>っ</sup>て<sup>て</sup>み<sup>み</sup>な<sup>な</sup>け<sup>け</sup>れ<sup>れ</sup>ば、け<sup>け</sup>っ<sup>っ</sup>して自<sup>自</sup>分<sup>分</sup>の<sup>の</sup>もの<sup>もの</sup>にな<sup>な</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>ん。

体<sup>体</sup>を動<sup>動</sup>か<sup>か</sup>して体<sup>体</sup>験<sup>験</sup>す<sup>す</sup>れば、天<sup>天</sup>から<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>エ<sup>エ</sup>ネ<sup>ネ</sup>ル<sup>ル</sup>ギー<sup>ギー</sup>が体<sup>体</sup>の<sup>の</sup>な<sup>な</sup>か<sup>か</sup>に入<sup>入</sup>っ<sup>っ</sup>て<sup>て</sup>き<sup>き</sup>て、生<sup>生</sup>き<sup>き</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>とがう<sup>う</sup>れ<sup>れ</sup>しくな<sup>な</sup>っ<sup>っ</sup>て<sup>て</sup>く<sup>く</sup>る。そ<sup>そ</sup>ん<sup>ん</sup>な<sup>な</sup>世界<sup>世界</sup>な<sup>な</sup>の<sup>の</sup>です。

私<sup>私</sup>たち<sup>たち</sup>の先<sup>先</sup>祖<sup>祖</sup>たち<sup>たち</sup>は、こ<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>して見<sup>見</sup>え<sup>え</sup>ないもの<sup>もの</sup>を見<sup>見</sup>て生<sup>生</sup>きる<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>とを<sup>を</sup>知<sup>知</sup>っ<sup>っ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>した。こ<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>は失<sup>失</sup>っ<sup>っ</sup>て<sup>て</sup>はな<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ない、大<sup>大</sup>切<sup>切</sup>な「日本<sup>日本</sup>の心<sup>心</sup>」だ<sup>だ</sup>と思<sup>思</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。

『お天道<sup>てんとう</sup>さま、あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>が<sup>が</sup>た<sup>た</sup>う。』 東城百合子 著 より